

〔研究ノート〕

『太梁公日記』に登場する絵師たち
—探円と俵屋—

日々の出来事を綴った日記は、当時の様相を伝えてくれる重要な歴史資料ともなります。日本最古の日記は飛鳥から奈良時代の人で、遣唐使に随行した伊吉博徳によるものと言います。平安時代以降になると、現在まで伝わる日記が多くなり、天皇、皇族、貴族など、主に政治面や文化面における有力者による日記が残されています。それらの日記の中には美術作品に関する記述もしばしば見られます。例えば、平安時代の公家・藤原実實の『小右記』には平安時代を代表する仏師である定朝に関する記録があり、室町時代の公家・三条西実隆の『実隆公記』には「北野天神縁起」「清水寺縁起絵」「後三年絵」など数多くの絵巻が登場し、作品の制作年代や制作背景、享受史などを明らかにする手掛かりとして美術史研究において大変有用な史料となっています。

ここでは、江戸時代の大名・前田治脩の日記である『太梁公日記』(図1)に記される二人の絵師について注目してみたいと思います。前田治脩は延享2年(1745)に加賀藩主・前田吉徳の子として生まれ、兄・重教の隠居により明和8年(1771)に家督を継ぎます。家督を継いだ明和8年から安永4年(1775)までの日記四十冊が前田育徳会に伝わっており、『太梁公日記』の名で呼ばれています。続群書類従完成会発行の『史料纂集』において、平成16年から『太梁公日記』の翻刻が出されており、現在までに第三巻までが刊行され、

安永2年4月までの日記が翻刻されています。その中の明和8年12月20日の条には、「此間も於其表為調候由に而、右探円画前田圖書等より指越、見申候処、図は柳に鳩、寿老人・鹿、都合二枚御座候、余り出来不仕候」と、探円という絵師の作品について記されています。治脩が加賀に在国中、家老の前田圖書などから探円の絵が二枚送られてくるのですが、出来は良くないと評価は低めです。続けて「此絵探円とは被存不申程之出来に而御座候」と記されることから、逆に言えば、通常は探円作品への評価が高かったのかもしれない。この探円とは、芝愛宕狩野家5代目の狩野探円のことと考えられます。狩野派の中でも「奥絵師」と呼ばれる中橋・鍛冶橋・木挽町・浜町狩野家の四家は旗本格的幕府の御用絵師であり、狩野派の中核を担っていましたが、その分家筋で、奥絵師を補佐したのが御家人格の「表絵師」と呼ばれる家で、十数家ありました。芝愛宕狩野家はこの表絵師の一つです。芝愛宕狩野家の祖である狩野即誓は『古画備考』(朝岡興禎著)に松平加賀守、つまり加賀藩の前田家に仕えていたことが記されています。『太梁公日記』にも即誓の作品が登場しており、明和9年10月24日の条には、老中役宅移徙を祝して、松平武元に即誓筆の二双の屏風を遣わしたことが記されています。一双は六尺五寸の金屏風で表には唐山水・人物、裏には竹に鳥が描かれており、もう一双は三尺の屏風で表には福

禄寿と寿老人、裏には紅白梅が描かれていたようです。即誓は18世紀前半頃に亡くなっていますので、前田家に伝来していた即誓作品を贈ったのでしょうか。このように、芝愛宕狩野家の祖である即誓と前田藩との関係が深かったことから、探円も加賀藩の御用を勤めていたと考えられます。

探円の名は『太梁公日記』の安永2年3月11日条に再び現れます。そこには「柱隠し金屏風一双、金沢に而出来(中略)今日到来す、尤無地也、追而老中招請前には探円か、又俵屋に画為調候答」と記されています。金沢から江戸の治脩のもとへ金屏風が届くのですが、まだ絵は描かれておらず、探円か俵屋に描かせようとしています。ここに探円と並んで登場するのが俵屋です。屏風を描く絵師として探円と共に候補に挙げられていることから、この俵屋も加賀藩の御用をしばしば勤めていた絵師であると考えられます。俵屋と言えば、桃山時代から江戸時代前期に活躍した俵屋宗達が有名ですが、安永2年頃に活躍していた俵屋としては、「明和・安永の頃の人なり」(酒井抱一編『尾形流略印譜』)と伝えられる俵屋宗理の名が知られます。「楓図屏風」(図2)「萩図」などの代表作がありますが、宗理より少し後に活躍した中村芳中や酒井抱一に比べると現存作品数は僅かです。葛飾北斎が寛政年間に宗理の名を継いだことが知られていますが、初代宗理の伝記についてはあまり明らかではありません。宝暦8年(1758)刊の巨川編『世説拾遺』に宗理の挿絵が載り、天明7年(1787)刊の山東京伝作『通言総鑑』に、袋戸の絵の筆者として宗理の名が挙がっていることから、宝暦から明和・安永を経て天明頃までが宗理の活躍時期なの

ではないかと推察されています。葛飾北斎・巨川・山東京伝など、いわば俗文化圏とのつながりが顕著でしたが、加賀藩の御用も勤めていたとなると、その出自を考える上で興味深いです。加賀藩と俵屋の関係と言えば、俵屋宗達の跡を継いだ俵屋宗雪が、寛永19年(1642)、加賀藩主前田利常の娘富姫が八条宮家の智忠親王に嫁した際に新築された御内儀御殿の障壁画を狩野探幽らと共に描くなど、加賀藩のための仕事をしていたことが知られています。また、俵屋工房で用いられていた「伊年」印の草花図が金沢に多く伝わることから、宗雪の頃から加賀に俵屋工房があったのではないかと考えられています。加賀の俳人の略歴とその歌を紹介する延享2年(1745)刊行の『もしほ依』には、「伊年」印を用いる等説という絵師について記されており、18世紀半ばにおいても、加賀には俵屋工房の残余があったことが指摘されています。俵屋宗理は加賀ではなく江戸で活躍しており、また、宗達よりもむしろ光琳への思慕が見られるなど、加賀の俵屋工房と江戸の俵屋宗理の関係はまだ明瞭ではなく、今後の調査・研究を必要としますが、『太梁公日記』の記述は、不明な点が多い18世紀後半の「俵屋」の動向を考える上で、注目すべき史料と言えます。加賀前田家の重臣であった横山家の亮立目録には、作例があまり多くない宗理作品(図3)が掲載されています。明治時代以降の所蔵の可能性もありますが、加賀と宗理のつながりを示すものかもしれません。(図1は『史料纂集 太梁公日記第一』続群書類従完成会、2004年から、図2は『ミュージアム』260号、1972年から、図3は『金沢市横山家入札目録』1924年から複写しました。宮崎も)

図1 『太梁公日記』第一冊 明和八年七月朔日条(前田育徳会蔵)

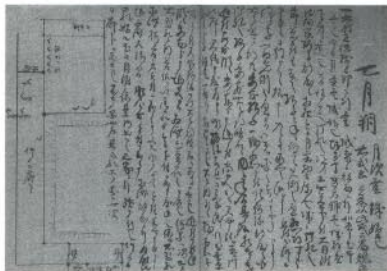
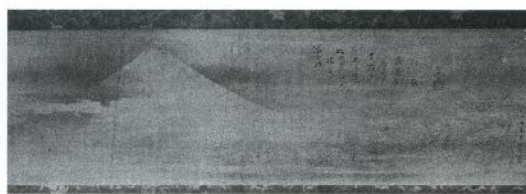


図2 俵屋宗理「楓図屏風」部分



図3 俵屋宗理「武蔵野富士横物」



季刊 美のたより No.171

平成22年8月1日

発行 大和文華館